

さまざまなプレイヤーと富 ——その主催者・富札購入者——

Part 2

ここでは、最盛期の富興行を題材に、興行としての成功をもくろんだ主催者側の工夫と、当せんを願って富札を買った参加者側の思惑について紹介する。

修復金の調達などを目的に寺社が主催者となることが多かった富。開催が大規模になると、主催者は興行をプロ集団「富師」に委託するようになった。

また、一定数以上の富札を販売することが興行には必要であったため、富札はまとまった数量で、主催者から富札の仲買・小売りをしていた市中の「富札屋」に卸売りされ、販売促進策もとられた。

一方、富札は庶民にとって高価であったため、求めやすいように価格を等分した「割札」を富札屋や主催者が作って販売することもあった。

東日本の富仕法書

富興行の主催者（寺社など）は、「富仕法書」で開催を広告し、富札を発行した。このうち、東日本で行われた富興行の資料を紹介する。

富仕法書の内容

当せん本数

100回抽せんし、前後賞等を合わせて2,700本余が当せん

当せん金

最高額は金1,000両

興行日

毎月22日

前後賞等の規定



主催者・会場名

湯島（天神）

組名と発行枚数

福・禄・寿・松・竹・梅の6組で、各1万枚
合計6万枚

富札の単価

金2朱

湯嶋大富宝金附

911433

富札の内容

印章

縁起の良い文様や文句が書かれている

主催者・会場名

湯島天神



組名

寿（福・禄・寿・松・竹・梅のうち）

開催時期

卯年・霜月（旧暦11月）
21日

番号

「八千二百六拾二」

富札 湯島天神

916716



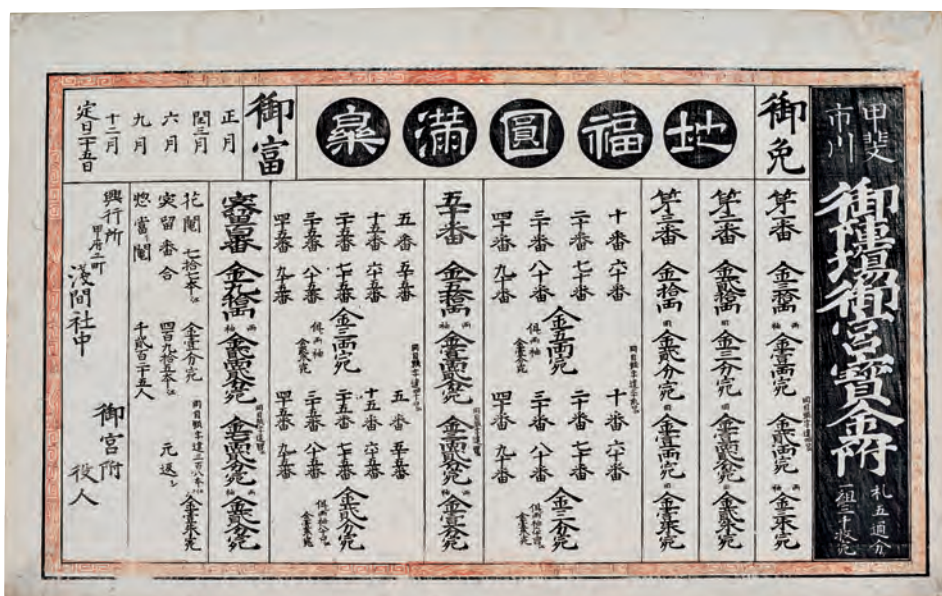
幸手不動院

御免御富宝金附

911424

武蔵国葛飾郡小淵村の幸手不動院が主催し、江戸の相森神社で行った御免富の富仕法書。興行は1833～36(天保4～7)年の間で許可された。主要な当せんは100本で、最高当せん金額は金90両。前後賞・組違い賞を合わせると、合計1,600本が当せんとなった。

富札は、「蓑・笠・袋(砂金袋)・珠(宝珠)」の縁起の良い4組で、各組7,500枚、合計30,000枚が発行された。富札の単価は銀1匁8分であった。



甲斐市川御陣場

御富宝金附

911425

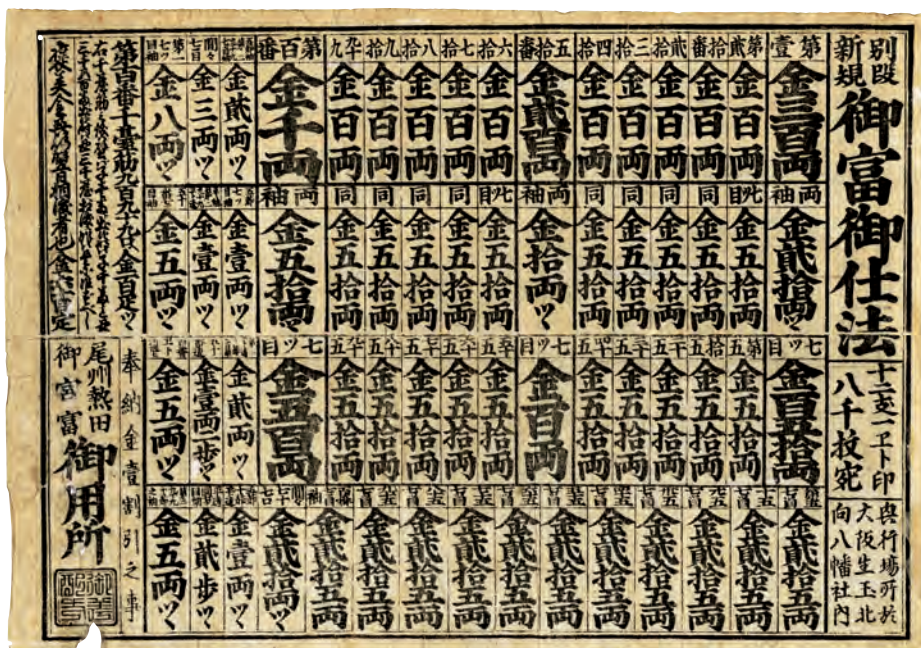
甲斐国市川の御陣場宮(御崎明神社)が主催し、甲府の浅間神社で行った御免富の富仕法書。興行は1830～32(文政13・天保元～天保3)年の間で許可された。

主要な当せんは100本で、最高当せん金額は金90両。前後賞・組違い賞を合わせると、合計1,225本が当せんとなった。

富札は、縁起の良い文言「地・福・円・満・楽」の5組で、各組3,000枚、合計15,000枚が発行された。

富仕法書のうち、西日本で開催された富興行の資料を紹介する。
富興行は庶民の生活に根付いており、富仕法書に似せて戯言を書き上げたものも作られた。





別段新規御富御仕法

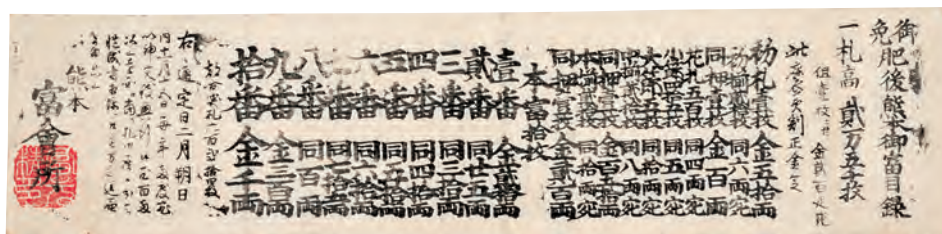
911394

尾張国の熱田神宮が主催し、大坂生玉の北向八幡社（生國魂神社の境内社）で行った御富富の富仕法書。主要な当せんは100本で、最高当せん金額は金1,000両と破格であった。当せん金からは「奉納金」として1割が引かれる旨も記載されている。富札は、十二支印の12組で、各組8,000枚、合計96,000枚が発行された。

御免肥後熊本

御富目録

911427



熊本の藤崎八幡宮が主催し、1854（嘉永7・安政元）年の2月と11月に行った御免富の富仕法書。神社の修復などを目的に行われた。富札は25,000枚発行され、単価は金200疋（金2分）であった。各回とも3日間にわたる大規模な興行で、624本の当せんが決められた。

日本第一借錢山

無養寺御富

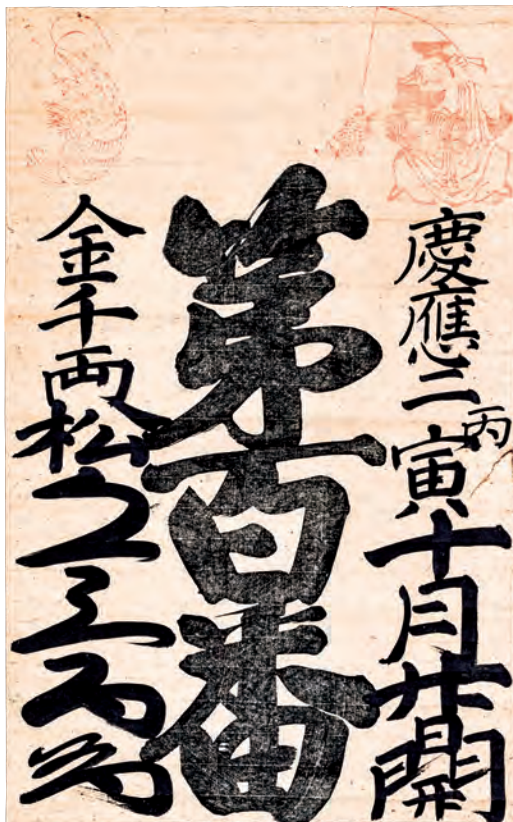
911432

富仕法書の形態に似せてさまざまな洒落を集めたもの。富札の発行枚数を記す部分には「面の皮 千枚、虚言 八百枚、都合千八百枚」、二番富の当せん金額欄には「中村四貫目」（歌舞伎役者の「中村芝翫」を掛けた）、などと書かれている。大坂で発行されたと考えられる。



当せん時の貼り出し

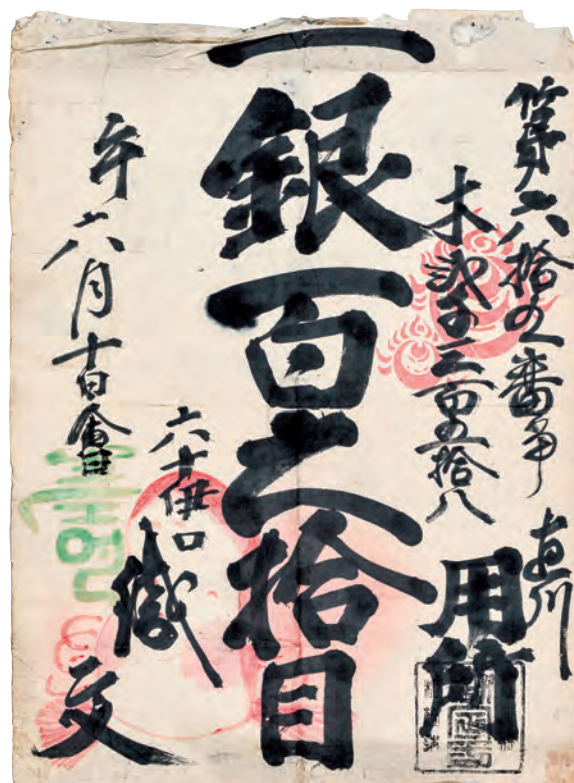
富突き会場には、当せん番号と金額を大書した紙が貼り出された。
また、当せん者には、当せん金を渡した旨を書いた文書が主催者から渡された。



富出番 金千両

911587

興行地は不明であるが、1866（慶應2）年10月20日に行われた富興行の資料で、富の当せん金額が金1,000両であることと、その当せん番号（出番）を大書した紙。富突き会場に貼り出されたと考えられる。



富出番
銀百六拾目
直川用所

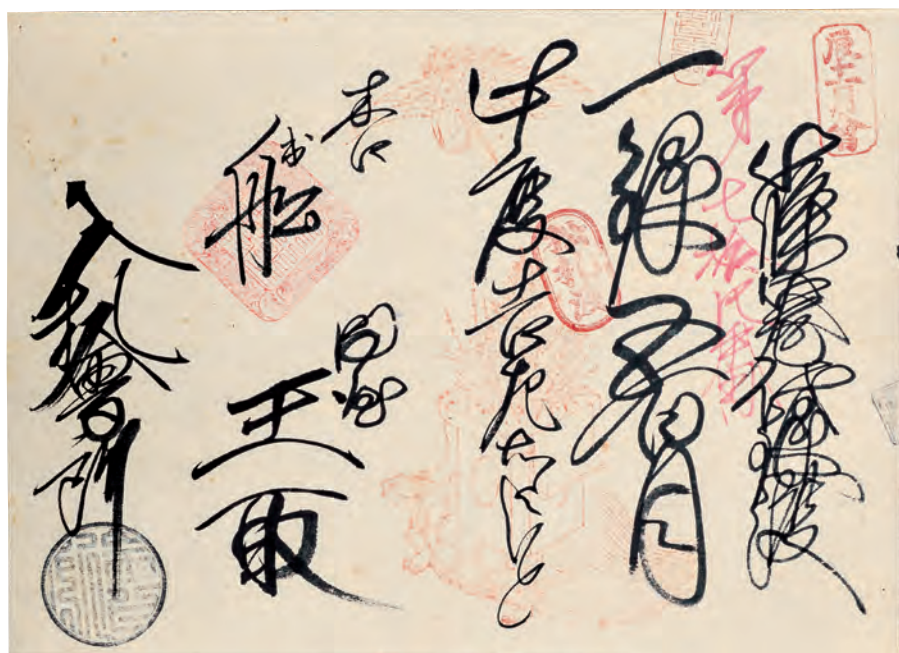
917432

紀伊国で開催された富興行「直川勘定元相統講」で貼り出されたと考えられる当せん金とその番号を大書した紙。縁起の良い「壽」の字とお多福の面が、彩色で描かれている。



富出番
銀五百目
丹生寺用所
917431

富突き会場に貼り出されたと考えられる資料で、当せん金とその番号を大書した紙。お多福の面などが彩色で描かれている点など、直川用所の資料と共通している点がある。



当せん金書付
909648

入札会所が、富の当せん者に銀500目を渡した際に書いた文書。冒頭に「篠巻代銀渡」とあり、中国地方などで行われていた、篠巻（繰綿を打って繊維にし、糸織りの原料としたもの）の入札を装った富興行で書かれたと考えられる。

富興行の請負構造と富札仲買

富は大掛かりな興行であったため、大量の富札を販売する方法として、主催者は富札の仲買「富札屋」に対し、まとまった数量で富札を卸売りしていた。また、主催者から、興行のプロ集団「富師」に興行自体が委託されることもあった。



売渡一札

909644

主催者である大坂の坐摩神社から、富札屋の伊賀屋平七へ、富札 1,000 枚が売り渡されたことを示す文書。上方の御免富が最盛期であった 1830（文政 13・天保元）年に書かれた。

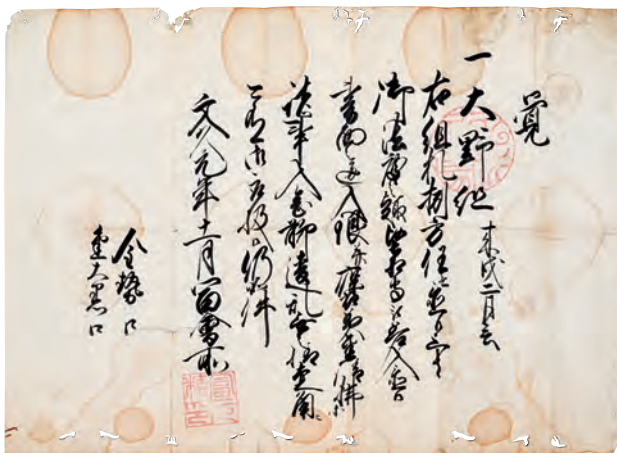


売渡申一札之事

909642

河内国の壺井宮（壺井八幡宮）が主催し、堺の天神社境内で行った御免富の富札 600 枚を売り渡したことを示す文書。1786（天明 6）年に書かれた。

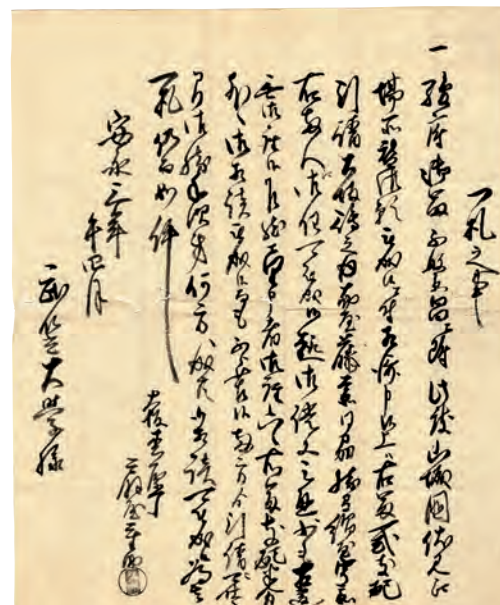
富札の売主は「富引受人 松屋民喜」ならびに「支配人 嘉右衛門」で、主催者の「壺井宮用所」が奥書していることから、この富興行自体が主催者から委託されたものであることがわかる。富札の購入者は「津国屋九兵衛」で、富札屋と考えられる。



覚（富札捌方任に付）

909645

主催者である富会所から「金勢口」「金大黒口」と称する富札取扱者へ、富札の取り扱いを委託したことを示す文書。江戸で御免富が禁止された後の 1861（文久元）年に書かれていることから、地方における富興行の資料と考えられる。

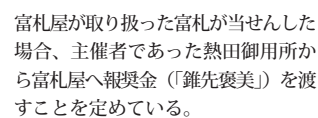
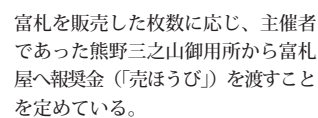


一札之事

909639

武蔵国の一宮女体社が伏見で御免富興行を行う際に書かれた文書。1774（安永 3）年に書かれた。まず「扇屋重助」が興行の支配を引き受け、さらに大坂の「布屋藤兵衛」「綿屋宇兵衛」の両名に興行の一切を委任する契約を、女体社神主の神主「武笠大学」と結んでいる。富興行の請負化が進んでいたことや、その構造が重層的であったことがわかる。

富興行の主催者のなかには、富札を多く売った富札仲買（富札屋）や、扱った富札が当せんした富札屋に対し報奨金を払い、富札の販売促進を図った事例もあった。



富札屋の店先

江戸の富札屋の店先の様子は、当時の錦絵に描かれた。店先では、富札の番号をある程度選ぶことができた。



「福徳稲荷」
(日本橋・福徳神社)

福徳神社の富札



当世名物鹿子
神社仏閣の一乃富
池田英泉 (1791 ~ 1848)
900155

立ち姿の女性と富札屋の店先を描いた錦絵。富札は興行地別に立てかけられている。
「福徳稲荷」と「白旗いなり」は、日本橋近くの神社。「茅場町」には薬師堂智泉院など、「両国」には回向院などの興行場所があった。



江都名所 湯しま天神社
初代歌川広重 (1797 ~ 1858)

900150

1834 (天保5) 年頃の湯島天神の正月の情景を描いた錦絵。男坂・女坂を上った合流点から北を眺めたもので、不忍池と寛永寺が描かれている。画面中央右側に描かれた建物が富札屋で、「千両」と書かれた札を貼り出し、柵に富札を並べている。



うでの喜三郎 尾上菊五郎
歌川国芳 (1797 ~ 1861)

901175

寛文年間 (1661 ~ 73) の江戸の侠客「腕の喜三郎」の立ち姿を描いた錦絵。喜三郎のエピソードは、歌舞伎や講談などに脚色された。背景には富札屋の店先が描かれ、「しらはた」「目黒」「湯嶋」の興行地別に富札が並んでいる。

富札屋と割札

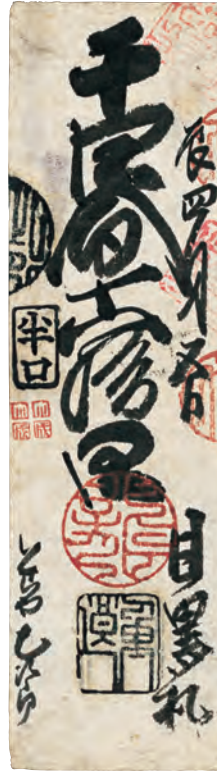
富札1枚の価格は金1朱～金2分で、庶民には高価なものであった。そこで、主催者や仲買の富札屋は、庶民が求めやすい価格に等分した「割札」を作って販売することもあった。当せん金もこの割合に等分された。



富札 谷中感應寺

916724

江戸の谷中感應寺（天王寺）で行われた富興行の際に、富札屋（本郷四丁目・川島屋鉄之助）が作った割札。「十人割」であること、本札を富札屋が預かっていることなどが捺印され、番号などが墨書されている。割札は本札に似せて作られた。



富札 目黒瀧泉寺

916737

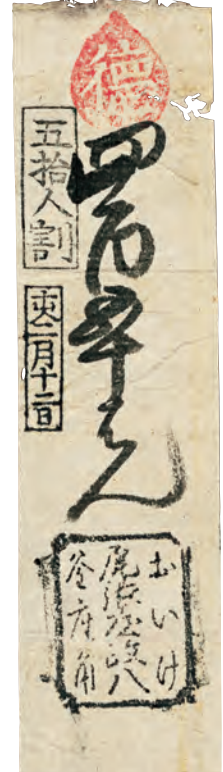
江戸の目黒瀧泉寺（目黒不動尊）で行われた富興行の際に、富札屋（とらや乙次郎）が作った割札。「半口」すなわち2等分であることが捺印されている。



富札 湯島天神

916764

江戸の湯島天神で行われた富興行の際に、富札屋（麴町平川天神社内・大和田屋三之助）が作った割札。「半口」であることが捺印されている。



富札

917333

京都で行われた富興行の際に、富札屋（御池釜座角・尾張屋政八）が作った割札。「五拾人割」すなわち50等分であることが捺印されている。50人割の割札は珍しいとされている。



富札 幸龍寺

916753

江戸の浅草幸龍寺で行われた富興行の際に、富札屋（浅草南馬道・高橋儀兵衛）が作った割札。「十割」であること、本札を富札屋が預かっていることなどが捺印されている。



富札 幸龍寺

916754

江戸の浅草幸龍寺で行われた富興行の際に、富札屋（駒込榎町・松村伊左衛門）が作った割札。「拾人乗」すなわち 10 等分であることなどが捺印されている。

先の資料（「富札 幸龍寺」916753）とあわせ、ひとつの興行につき、複数の富札屋が割札を作っていたことがわかる。



富札預り書

917401

本札の所持者が割札を作るために富札屋（湯島天神裏門前・栄屋栄次郎）に本札を預けた際にその証拠として書かれた文書。本資料は割札とも考えられる。



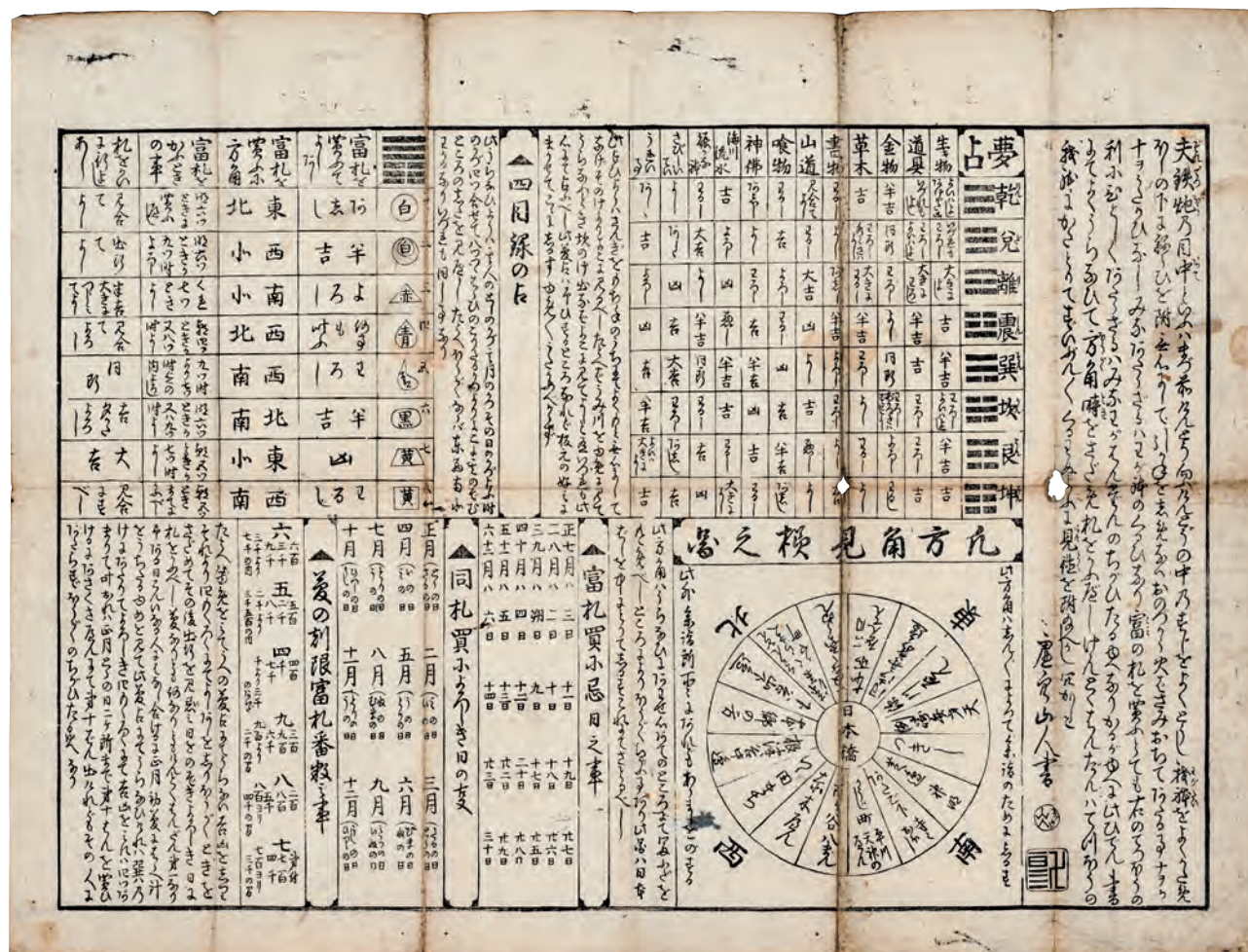
富札 穴八幡宮

916731

江戸の牛込穴八幡宮が主催し、相森神社で行った富興行の際に発行された富札（本札）。富札屋が本札を売る際、包紙（右）に包んで売った。

富夢占

富札の購入者は、富札の番号を選んで買うことができたため、番号の選び方が焦点となった。その際、八卦、眠った時に見た夢の内容と時間帯などをもとにした占いが参考にされた。



富夢占

911577

夢を見た時間帯や内容、方角などの判断を組み合わせ、富札を買うのに適した日や、番号を占っている。「鉄砲を撃つ時に狙いを定めるように、富札を買う時にも道理がある。当たらないのは、買う者の判断が違っているからだ」と記されている。

四目録の占

数字などによる占い「四目録」を使って、富札を買いに行く方角の吉凶などを占った。

夢の制限

富札番数之事

夢を見た時間帯を使って、買うべき富札の番号を占った。

夢占

八卦と、見た夢の内容を組み合わせて、富札を買う吉凶を占った。

富札買忌日之事

月ごとに、富札を買う際に避けた方がよい日付と、買うべき日付を挙げている。





富出番録

富突きで決まった当せん番号は、会場に貼り出されただけでなく、一覧の刷物「富出番録」で周知された。



御富出番録

911466

江戸の三縁山（増上寺）が主催し、京都の四条道場で行った富興行の当せん番号を一覧にした刷物。丑年8月19日の富興行の分で、出番順（富駒が突かれた順）に記載されている。



尾州一宮神福富番付

911498

尾張国の一宮（真清田神社）が主催し、名古屋の浅間神社で行った富興行の当せん番号を一覧にした刷物。子年12月14日の富興行の分で、出番順に記載されている。粗末な漉き返し（古紙を再生した紙）に刷られており、末尾には「急仕立てで刷ったので、番号の間違いについては、興行主の元帳を調べるように」との注意書きがある。



幸手不動院 江戸杉森於社内興行

911486

幸手不動院が主催し、江戸の相森神社で行った富興行の当せん番号を一覧にした刷物。申年2月21日の富興行の分で、上部には当せん金が高額な、きりの良い順番の当せん番号が書かれている。その下には、千の位の単位でマスが書かれ、組別に当せん番号を検索できるようにになっている。



西十月廿二日 湯しま

911570

湯島天神の富興行の当せん番号を一覧にした刷物。酉年10月22日の富興行の分で、書式は、左の資料「幸手不動院 江戸杉森於社内興行」（911486）と同一。当せん番号の検索の便宜が図られている。